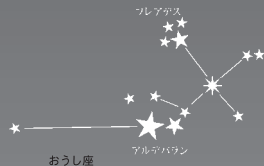


ポラリスを仰ぐ北の大地から



脳機能は老化するのか

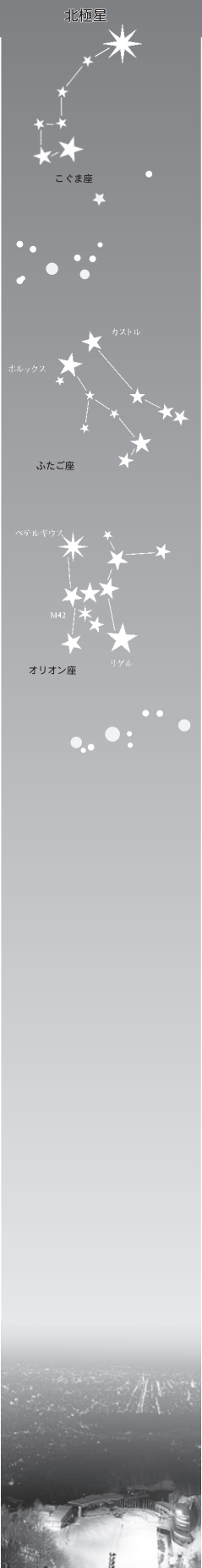
北広島医師会 会長 つしま のぶやす 対馬 伸泰

ここ数年自分の記銘力が衰えてきていることを認識するようになった。簡単に言えば物忘れだ。奥さんに物事を尋ねると「このまえ言ったでしょ」と言われることもしばしば。当の本人は言われた記憶はまったくない。講演会に行つて次の日にノイエスを言えと言われても自信がない。講師が「今日はこれだけは覚えて帰ってください」ということがしばしばあるがそれもきちんと覚えているのか怪しいものだ。体力の衰えは至極当然のことと理解しているが脳の機能も年齢とともに衰えていくのか？ そうであれば自然の摂理として受け入れざるを得ないのか？

米タフツ大学の研究グループは若者グループと年配者グループに対し記憶力のテストを行ったところ、両者間に有意な差は認めなかったとしている。しかも加齢による記憶力の低下は単なる思い込みと結論付けている。年齢とともに膨大な情報が蓄積され、その情報を引き出すのが難しくなるだけなのだ。

一方でMIT(マサチューセッツ工科大学)のジョシュア・ハーツホーン氏は脳機能を能力別に分類し、それぞれに対しピークとなる年齢を研究した。結果は総合的な情報処理能力と記憶力は18歳、名前の記憶22歳、顔認識能力32歳、集中力43歳、感情認知能力48歳、基本的計算50歳、新しい情報を学び理解する能力50歳、語彙力67歳と結論付けた。やはり記憶力は若い時がピークかと落ち込むことなかれ。能力によっては高齢者に軍配が上がるものもあるのだ。感情認知能力とは相手をおもんばかりの能力だ。人間として医師としてもっとも必要とされる能力の一つではないのか？ 語彙力に至っては67歳がピークだ。

自分も63歳・肉体的能力の低下はさすがに徐々に感じている。しかしながらこれからは年齢相応の残存する脳的能力を発掘するとともに、自分の脳はまだ大丈夫だと言いつけ、可能な限り地域や患者をおもんばかりのように脳トレをしようと考えている。



一抹の不安

函館市医師会 会長 ほんま さとし 本間 哲

コロナ禍の収まり止まぬうちに北京冬季五輪が開会され閉幕した。何かと物議を醸した五輪だったが、周囲の風評には耳を貸さずにサッと終わった感がある。さすがスポーツ大会だけに感動と興奮を提供してくれた。日本は金3個、銀6個、銅9個と史上最高のメダルを獲得したが、腑に落ちないところも多々あった。審判のジャッジメントは選手からは文句のつけようのないことだが、スーツ規定違反の判定で失格、疑問の進路妨害で失格、難度の高い技を成功させているのに低評価、挙げ句の果てはドーピング問題を糾弾すべきところを曖昧にするなど前代未聞の大会だったのでなかろうか。これは中国で開催されたからだ、妙に納得してしまうのは小生だけだろうか？ 冬の祭典の熱狂に注意を奪われて新疆ウイグル自治区問題、人身売買問題、台湾問題、海洋進出問題など中国に向けられた多くの疑問が風化しやすいか心配である。

五輪後にわかに緊迫の度合いが増したのは、ウクライナ問題である。外交的解決を模索する動きがあったにもかかわらず、ロシアが予定の行動とばかりに動いた。ウクライナ東部2州の親ロシア派地区の独立をロシアが勝手に認め、平和維持と称して北部ベラルーシと南部クリミアの三方から軍事侵攻した。東西ドイツ再統一以来の怨念がそうさせたのかも知れないが、理不尽なやり方である。計画はバイデン政権発足時から練られていたとの話もあるが、トランプだったらどうだろうか？ 西側諸国からの経済制裁も中国の存在で効果が疑問視され、むしろ欧州へのオイル供給遮断がもたらすダメージが大きいように思われる。今回のウクライナ侵攻がまかり通るなら、中国が台湾併合や尖閣奪還に向けて動き出す懸念は大きい。もしコロナ禍の扇動から今回の一連の動きを中露の作戦と考えるなら、恐ろしいことではあるまいか。